

白居易と洛陽

中尾, 健一郎
九州大学大学院人文科学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9584>

出版情報：中国文学論集. 34, pp.16-29, 2005-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

白居易と洛陽

中 尾 健 一 郎

中唐の白居易は、唐代最多の作品を残し、日本文学にも多大な影響を与えた詩人である。特にその後半生の詩は、前半生における諷諭詩の持つ激しさとは対照的に、穏やかで円熟味のある内容が多く見られる。

ところで、白居易が数々の秀作を生みつつ後半生を過ごした洛陽については、従来長安における政争に嫌気がさした彼が、東都分司という閑職を得ることにより、中隱の境地を実現した退老の地とする見方がほぼ定説となっており、洛陽退居以前の白居易と洛陽との関わりについてはほとんど取りあげられることがなかった。特に青年時代の白居易と洛陽との関わりについて論じた論文は皆無に近い¹⁾。

しかし筆者は、白居易が老年に至って洛陽に退居したのは、従来言われているように、政争を避けんと欲したことほかに、洛陽が白居易にとって若き日の思い出の土地であり、かつ子弟の教育に情熱を注いだ場所であった、というもう一つの意外な事実を発見した。白居易の心目中の洛陽は、「二層構造」で捉えられているのであり、その構造とは、老年における退隱並びに子弟教育の地としての洛陽が、青年時代の思い出の地としての洛陽の土台の上に存在するというものである。つまり、白居易にとって洛陽とは、後半生の詩から窺われるような単なる悠々自適の地ではないのである。また、白氏一族の墓所は本来長安に近い下邳に存在したのであるが、白居易は下邳ではなく、洛陽龍門にある香山寺を墓所と定めている²⁾。白居易が洛陽に常ならざる愛着を抱いていたことは言を俟たないが、墓所まで一族のものとは異なる洛陽に定めたということは、彼が洛陽に特別な思い入れをもっていたことの証左と言える。以下、小論では青年時代、江州時代、洛陽退去後の白居易と洛陽との関わりに焦点をあて、従来の

観点とは異なる角度から、白居易の内面世界における洛陽の位置づけを試みたい。³⁾

一 洛陽に帰ってきた白居易

白居易が洛陽の履道里に居を構えたのは、杭州刺史退任後、長慶四年（八二四）に太子左庶子東都分司を拜してのことであるが、次の詩はその時の作である。

五年職翰林	四年蒞潯陽	五年	翰林に職し、四年	潯陽 <small>ウソ</small> に蒞む
一年巴郡守	半年南宮郎	一年	巴郡に守たり、半年	南宮に郎たり
二年直綸閣	參年刺史堂	二年	綸閣に直し、三年	刺史の堂にあり
凡此十五載	有詩千余章		凡そ此れ十五載、詩は千余章あり	
境興周万象	土風備四方	境興	万象に周ねく、土風	四方に備はる
独無洛中作	能不心悵悵	今	洛中の作のみ無し、能く心の悵悵とせざらんや	
今為春官長	始來遊此鄉	今	春官の長と為り、始めて來たりて此の郷に遊べり	

〔洛中偶作〕 卷八・〇三七九

翰林学士より杭州刺史に至るまで、白居易が歴任した官職とそれに従事した年数が羅列された後、それぞれの任地で詩興を催したが、ただ洛陽で作ったものがないと詠われている。そして今東都分司の官を授かりようやく此処に遊ぶことができたとある。だが、洛陽での作がないというのは事実ではない。『白氏文集』第十三卷には、白居易が青年時代に洛陽で作ったとされる詩が六首収められている。しかも白居易はこの詩にまるで初めて洛陽を訪れたかのような口吻を見せているが、実は貞元十四年（七九八）二十七歳の時から貞元二十年（八〇四）まで洛陽に居を構えた時期がある。その間に科擧受験のため、洛陽、安徽、長安と各処を往来しており、常に洛陽に滞在したわけではないが、家は六年間そのまま洛陽に置かれ、下邳に移るまで洛陽が白居易の故郷であったと言っても過言ではない。つまり白居易が大和三年（八二九）に履道里の邸宅を終の住処とすることを決意して洛陽に退居したの

は、ある意味では青年時代に住んだ故郷への帰郷であったと言えるのである。

しかし、このことは従来あまり重要視されなかった。その理由は主に三つ考えられる。まず貞元十四年（七九八）に符離から洛陽へと移居した白居易は、その翌年に宣州へ赴いて郷試に参加し、貞元十六年（八〇〇）には長安で進士科を受験するなど、その行動が慌ただしく、常時洛陽に滞在したわけではないからである。次に現存する『白氏文集』中に白居易が青年時代に洛陽で作ったと覚しき詩篇が多くは残されていないからである。最後に白居易自らが青年時代に嘗て洛陽に居住したことについてほとんど言及しないばかりでなく、長慶四年（八二四）に洛陽を訪れた際に初めて訪れたかのような口吻を用いているからである。だが、「洛中偶作」が作られた六年後の大和四年（八三〇）には、白居易が洛陽と縁浅からぬことを匂わせる詩が作られている。「洛陽春」と題する詩がそれである。

洛陽陌上春長在 昔別今来二十年 洛陽陌上 春長に在り、昔別れ 今来たること二十年

唯覓少年心不得 其余万事尽依然 唯だ覓むるに少年の心のみ得ず、其の余は万事尽く依然たり

〔洛陽春〕 卷五十八・二八一二

二句目に「昔別れ今来たること二十年」とあるが、この詩が作られる二十年前と言えば、白居易が京兆戸曹參軍であった元和五年（八一〇）のことである。しかし、この年白居易が洛陽へ赴いた形跡はなく、「年」字が韻字であることを考えれば、「二十」はおそらく概数である。母の喪に服して下邳に退居していた元和六年（八一二）頃に洛陽を訪れたのであろうか。それからおよそ二十年が過ぎ、「洛陽の春」は「少年の心」が既に失われていることを除けば、すべてもとのままである、と白居易は詠うが、そこには洛陽を去ってから二十年余の歳月が経過したことに対する深い感慨がこめられている。実際に青年時代の白居易にとって洛陽は故郷として意識されていた。例えば次の詩を見よう。

十年常苦学 一上謬成名 十年 常に苦学し、一たび上り 謬ちて名を成す

擢第未為貴 賀親方始栄 第に擢んでらるるも未だ貴しと為さず、親に賀して方に始めて栄あり

.....

.....

翩翩馬蹄疾 春日歸鄉情 翩翩として馬蹄疾く、春日 歸郷の情あり

〔及第後歸觀留別諸同年〕 卷五・〇二一〇

この詩は、貞元十六年（八〇〇）進士及第後、長安から洛陽へ帰っていく白居易の心情を詠ったものであるが、十年間の苦学の結果進士及第を果たし、何にもまして嬉しいのは母親に及第を報告できることである。馬の足どりも軽く、故郷へ帰りゆく気持ちは自然と浮き立つという。この詩に詠われるように、この時期の白居易は明らかに洛陽を故郷として認識していた。それでは、何故「洛中偶作」においては、洛陽で詩を作るのは初めてだと言っているのであるか。この問題を考慮するには、青年時代の白居易と洛陽の関係についてふれなければならない。

二 青年時代の白居易と洛陽

青年時代の白居易が、洛陽に滞在したことに關する資料は多く残されていないが、白居易の詩文からその一端を窺うことができる。例えば、白居易が洛陽に家を置いた翌年の貞元十五年（七九九）に作られた次の賦を見よう。

貞元十五年春、吾兄吏于浮梁。分微祿以歸養、命予負米而還郷。出郊野兮愁予、夫何道路之茫茫。茫茫兮二千五百、自鄴陽而歸洛陽。……況太夫人抱疾而在堂。自我行役、諒夙夜而憂傷。惟母念子之心、心可測而可量。

〔傷遠行賦〕 卷二十一・一四一〇

賦の内容から、貞元十五年（七九九）に、白居易が浮梁の官吏であった長兄白幼文の命により、浮梁から米を担いで洛陽にいる母の元へと帰ったことが看取されるが、当時白居易は病気の母を抱えており、洛陽まで自ら米を運ばねばならぬほど困窮していたのである。また、符離より洛陽に移居した後の白居易は、旅行期間を除き、彼の地で勉学に励んでいたものと考えられるが、洛陽滞在時の白居易の状況については次の詩が参考となる。

陋巷孤寒士 出門苦栖栖 陋巷 孤寒の士、門を出づれば 苦だ栖栖たり

……

平生同門友 通籍在金閨 平生 同門の友、通籍 金閨に在り

白居易と洛陽

昔年洛陽社 貧賤相提携
今日長安道 對面隔雲泥
近日多如此 非君独慘悽

昔年 洛陽の社、貧賤 相い提携す
今日 長安の道、對面 雲泥のごとく隔てり
近日 多くは此くの如し、君の独り慘悽なるのみに非ず

〔秦中吟十首・傷友〕 卷二・〇〇七八 傍点筆者

白居易の「傷友」は、官吏登用にあたつて明暗を分けた洛陽の士人の姿を詠つたものである。またこれは青年時代の白居易にとつて、洛陽がどのような都市として意識されていたかを示す恰好の資料と言える。この詩には長安で成功することができず、うらぶれた日々をおくる苦節の士が登場する。彼は長安にて以前師を同じくして学んだ同輩と再会するが、その同輩は榮達し、昔の学友のことを完全に忘却している。洛陽では貧賤を共にし、助け合った間柄であるというのに、長安での今日の對面にあたり、一方は官僚、もう一方は貧賤の士と、兩者の立場は雲泥を隔てるが如き違いがあるというのである。ここで注目したいのは、洛陽が雌伏の地、長安が榮達の地として對比されていることであり、「傷友」に對比される官僚と貧士が嘗て共に学んだ土地が洛陽とされていることである。このように、洛陽で貧賤に耐えながら学ぶということは、白居易自らの生々しい実体験でもあつた。

促膝齊貧賤 差肩次後先 膝を促して貧賤を齊しくし、肩を差がへて後先を次ぐ

他日昇沈者 無忘共此筵 他日 昇沈する者あるとも、此の筵を共にせしを忘ること無かれ

〔東都冬日会諸同声宴鄭家林亭〕 卷十三・〇六一

この詩は貞元十七年（八〇一）洛陽における作である。貧賤を共にする書生たちの宴の席で作られたものであるが、「他日昇沈する者あるとも、此の筵を共にせしを忘ること無かれ」と詠つのは、一座の同輩に貧賤に耐えつつ切磋琢磨した仲間のことを忘るまいぞ、と呼びかけたのである。その八年後の元和四年（八〇九）に作られた「傷友」は、はからずも洛陽で共に学んだ同輩に、かくのごとき薄情者が少なからずいたことを憤るものであつたと言えるだろう。

白居易の洛陽における交友関係はあまり明らかでないが、鄭方以外に少なくとも二人の人物をあげることができ⁷⁾る。一人は柳大(名は未詳)であり、もう一人は劉敦質である⁸⁾。柳大については、「傷友」に見える洛陽の「白社」で共に遊んだことが「長安送柳大東歸」(卷十三・〇六五)に詠われている。また劉敦質については、「哭劉敦質詩」(卷一・〇〇二六)という詩が残っており、若くして死んだ友人への哀悼が捧げられている。長安に安住できず洛陽へ帰っていく柳大、不幸にも短命に終わった劉敦質。白居易が彼らに深く同情するのも、苦楽を分かち合った洛陽時代の経験によるものと考えられる。このほかにも友人と洛陽を詠んだものがある。

莫悲金谷園中月 莫歎天津橋上春 金谷園中の月を悲しむこと莫かれ、天津橋上の春を歎くこと莫かれ

若学多情尋往時 人間何処不傷人 若し多情を字びて往時を尋ぬれば、人間何れの処か人を傷ましめざらん

(「和友人洛中春感」 卷十三・〇六二四)

この詩には、洛陽が多感な人を傷心させる土地として捉えられており、これには多感な白居易自身(9)の経験も重ね合わされている。しかもこの詩が作られた永貞元年(八〇五)は、白居易が洛陽から下邳へと居所を移した翌年の春である。去ったばかりの洛陽は、白居易を傷心させる何かを有していたと見てよい。

ここまでで紹介した詩のほかに、白居易の青年期の作品において、洛陽を悲劇の舞台として詠つものが見られる。

上陽人 紅顔暗老白髮新 上陽人、紅顔暗かに老ひ 白髮新たなり

緑衣監使守宮門 一閉上陽多少春 緑衣の監使 宮門を守り、一たび上陽に閉ざされ多少の春ぞ

(「新樂府・上陽白髮人」 卷三・〇二二一)

洛陽迎得如花人 新人迎來旧人棄 洛陽に迎へ得たり 花の如き人、新人迎へ來たりて 旧人棄てらる

(「新樂府・母別子」 卷四・〇一五七)

諷諭詩以外に、洛陽にまつわる詩を挙げると、隱遁者を羨む唱和詩や、高山へ帰りゆく友人へ贈った送別詩がある。

歸夢杳何処 旧居洛水東 歸夢 杳として何れの処ぞ、旧居 洛水の東にあり

(「見蕭侍御憶旧山草堂詩因以繼和」 卷五・〇一八三)

朝遊九城陌 肥馬輕車欺殺客 朝に九城の陌に遊べば、肥馬 輕車 客を欺殺す
暮宿五侯門 殘茶冷酒愁殺人 暮に五侯の門に宿れば、殘茶 冷酒 人を愁殺す
春明門 門前便是高山路 春明門、門前 便ち是れ高山の路

〔送張山人歸高陽〕 卷十二・〇五八三

ただ蕭侍御に和した詩は唱和の作であり、白居易自身の真情が述べられたとは見なし難い。高山へ歸る張山人は、長安で志を得ることができず、やむを得ない選択として入山するのであるため、隱遁の地としての洛陽は、同時に仕の望みが叶わず、隱遁・雌伏を余儀なくされている士人の住む場所としても捉えられていることがわかる。前出の柳大を送る詩も同様に見るべきであろう。これらのことからわかるように、青年期の白居易にとっての洛陽は、登科以前は家族共々貧賤に苦しみ、かつ同学の貧士と共に助け合つた苦学の思い出が残る土地である。そして登科以後は死者の記憶の残る土地、隱者の住む土地であり、また志破れた士人が歸つて行く土地であったのである。白居易が青春時代を過ごした洛陽について多くを語らないのは、多感な彼を傷心させる記憶のなせる業であったのではなかったか。少なくとも翰林学士の榮譽を享受していた頃の白居易にとって、洛陽は長安における栄光の対極にあり、落伍者の住む負のイメージを帯びた、自身も辛い記憶を背負つた都市として意識されていたはずである。

三 江州左遷時代の白居易と洛陽

長安で宮仕えの身となつた白居易は、元和十年（八一五）に大きな政治的挫折を味わうことになる。武元衡暗殺事件に端を發する江州左遷である。この頃から洛陽に対する負のイメージは弱まりつつあつたのか、意外なことに洛陽を故郷として想う詩が作られるようになる。左遷の地江州に向かう途上、鄂州で作られた次の詩がその嚆矢である。

白雪楼中一望郷 青山簇簇水茫茫 白雪楼中 一たび郷を望めば、青山は簇簇たり 水は茫茫たり
朝来渡口逢京使 説道烟塵近洛陽 朝来 渡口に京使に逢ひ、説道らく 烟塵 洛陽に近しと

〔登鄂州白雪楼〕 卷十五・〇八七七

白雪楼から故郷の方を眺めやると、青々とした群峰、滔々と流れる長江が見える。そうした折り、都から来た使者から、反乱の兵火が洛陽に迫ったことを聞くのである。「望郷」の場所が、長安・洛陽のいずれであるかは明らかにされていないが、その翌年に作られた次の詩からは、白居易が気に掛けているのが洛陽であることが明瞭に見てとれる。

溇陽遷謫地 洛陽離亂年 溇陽 遷謫の地、洛陽 離亂の年

烟塵三川上 炎瘴九江辺 烟塵 三川の上、炎瘴 九江の辺

郷心坐如此 秋風仍颯然 郷心 坐るに此くの如し、秋風 仍ほ颯然たり

〔憶洛下故園〕 卷十・〇五〇一

この詩においては、自らが左遷されている炎熱の地溇陽と、兵乱に遭う故郷洛陽とが対比されている。ここで白居易が望郷の念を抱いているのは明らかに洛陽である。白居易は秋風に吹かれながら、洛陽の故園の様子を憂いているのである。元和十二年（八一七）の春に作られた「溇陽春三首」にも故郷を思う気持ちで詠われている。

春来触動故郷情 忽見風光憶兩京 春来 触動す故郷の情、忽ち見ゆる風光に兩京を憶ふ

金谷躡花香騎入 曲江碾草細車行 金谷 花を躡み 香騎入り、曲江 草を碾き 細車行けり

〔溇陽春三首・春来〕 卷十七・一〇二一

春の訪れによつて故郷を思う気持ちが発せられると詠われているが、その故郷とは洛陽と長安であり、就中思い出されるのは洛陽の金谷園と長安の曲江である。白居易が甚だ曲江を愛したことについては、既に妹尾達彦氏の指摘があり、金谷園は前出「和友人洛中春感」に「金谷園中の月を悲しむこと莫かれ」とあることから、ここでも青年時代に遊んだ洛陽が懐古されていることがわかる。「春来」に見られるように、白居易が江州で詠んだ望郷の詩に現れる故郷とは必ずしも洛陽だけに限られるわけではないが、遠い南方の遷謫の地で白居易は、都の長安に劣らないほど洛陽を懐かしんでいたことがわかる。江州左遷が白居易の人生における大きな転機であることは既に指摘があるが、筆者は、江州における洛陽を故郷と見なすこれらの詩が、やがて白居易の洛陽退居の決断へとつながったと考える。勿論この時点でやはり長安は魅惑の地であり、洛陽はそれに準じる位置を占めたに過ぎなかったかも

しれぬが、政治の世界における振り子が長安における成功の反対の方向にふれた時、そこには自然と嘗ての故郷洛陽があった。前述のように江州左遷以前の白居易の詩において、洛陽は隱者が住む場所であると同時に立身の夢が破れた士人が帰って行く土地でもあるが、長安で挫折し南方に逐いやられた白居易が、閑静で政治色の薄い洛陽に望郷の念を覚えたとしても何の不思議もない。

白居易の洛陽への望郷の念は、一時的な感情ではなかった。長慶四年（八二四）に洛陽履道里邸を購入した二年後に作られた次の詩は、蘇州刺史を辞める直前の作である。

心中久有帰田計 身上都無濟世才 心中久しく帰田の計有り、身上都て濟世の才無し

長告初從百日滿 故郷元約一年迴 長告初めて百日の満つるに従ひ、故郷は元と一年に迴るを約せり

〔百日仮滿〕 卷五十四・二四八三

この詩に明らかなように、白居易は一年以内に故郷洛陽に隱遁するつもりでいた。長安に自邸があるにもかかわらず、洛陽が故郷であるとはつきり認識されているのである。白居易は、江州左遷という政治的挫折を契機として、洛陽に対して抱いていた負のイメージを払拭し、洛陽を故郷として意識しはじめた。勿論長安も故郷として意識されてはいたが、この時芽生えた望郷の念は次第に明確な形を取り、やがて晩年の洛陽退居として結実していくのである。

四 白居易の洛陽退居と子弟教育

元和十五年（八二〇）、長年にわたる南方への左遷から長安に戻ってきた白居易は、やや遅れ気味であったが、尚書司門員外郎を皮切りに、長慶元年（八二一）に主客郎中、中書舎人と順調に出世の道を歩みはじめた。白居易の出世と歩調を合わせるかのように、弟白行簡も左拾遺を拝した。そして白居易はこの年に貴族の邸宅が多く構えられ、立地条件の良い新昌里に邸宅を購入した^①。白行簡とともに、やがてはこの場所を白氏一族の繁栄の地と定めることを計ったのである。だが、その翌年に白居易は杭州刺史に転出することになった。次の詩は、往路にて白行

簡の息子亀児に寄せたものである。

謫宦心都憤 辞郷去不難 宦謫せらるるも 心都すべて憤れ、郷を辞するも去るに難からず
縁留亀子住 涕淚一闌干 縁留 亀子を住まめ、涕淚 一たび闌干たり

〔路上寄銀匙与阿亀〕 卷二十・一三一六

詩の内容から勘案すれば、この時白居易は杭州へ赴いたが、白行簡の一家は新昌里に残ったと思われる。左拾遺から後の白行簡の官歴をたどれば、司門員外郎、度支郎中、主客郎中、膳部郎中を歴任しており、卒年の宝曆二年（八二六）まで、一家ともに新昌里の邸宅に居住していたと見られる。白居易が新昌里に邸宅を構えたまま、長慶四年（八二四）に洛陽履道里に邸宅を購入したのも、場合によっては白行簡に新昌里邸を譲り、自らは故郷である洛陽に帰ろうと考えたからではなからうか。だが残念なことに、白行簡は白居易が蘇州刺史在任時に病没してしまった。白居易が彼の死をどれほど悲しんだかは、『祭弟文』（卷六十・二九三二）を読めば十分理解できるが、この時から白居易は江州時代に扶養することになった白幼文の七人の遺児だけでなく、白行簡の家族まで扶養しなければならなくなった。つまり白行簡亡き後、白氏一族の命運は、白居易一人の双肩に担われることになったのである。このことは後の白居易の人生に大きな影響を及ぼしたと考えられる。アーサー・ウェイリーは次のように述べる。

白が、彼自身のためでなくとも、少くとも一族全体の名誉のため、宰相になる危険を冒すべきではなかったかと、時に考えたことは確かである。^①

ウェイリーは、白居易が宰相になることを考えたことは確かであると述べているが、これについては逆のことも言える。つまり白行簡を失い、一族全体の命運が白居易の双肩に委ねられているからこそ、政争の渦中に身を置き一族の没落を招くことは、絶対避けねばならぬことであった。そして白居易自身の政治的意欲を犠牲にしても果たされなければならなかったのが白氏一族の繁栄ではなかったか。また一族の繁栄を盤石のものとするには、嘗ての白居易がそうであったように、一族の子弟が学問によって身を立てることが有力な方策であったはずである。

こうしたことを考慮に入れば、白居易にとって、明哲保身並びに一族の繁栄との両方を実現させる方策が、太和三年（八二九）の洛陽退居だったと考えられる。洛陽履道里邸の環境が快適であったことは、白居易の洛陽退居

後の多くの詩文から窺うことができ、白居易は洛陽における悠々自適な生活を満喫していたように見える。しかし、洛陽退居後の白居易の動静には不可解な点がある。それは長安の新昌里邸を大和九年（八三五）まで保有し続けたことである。履道里に安住していたはずの白居易が、新昌里の邸宅を手放さなかったのは一体何故だろうか。長安に対する未練を断ち切ることができなかったからであるとも考えられるが、筆者は異なる観点からこの問題を考えたい。つまりこの問題を解く鍵は、白居易の甥にあると考えるのである。

亀児頗有文性、吾每自教詩書、三二年間、必堪応奉。

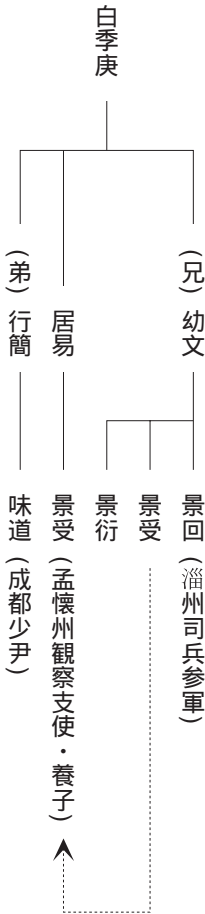
〔祭弟文〕 卷六十・二九三二

亡き弟白行簡を追悼し、大和二年（八二八）長安にて著されたこの文には、白行簡の息子亀児を白居易が自ら教育しており、後二三年もすれば科擧に応じることができると記されている。またその翌年の大和三年（八二九）に著された「池上篇序」には、白居易が洛陽に至って間もなく、子弟を教育するため書庫を建てたことが述べられている。

雖有子弟、無書不能訓也。乃作池北書庫。

〔池上篇序〕 卷六十・二九二八

つまり白居易は、自ら教育した亀児の科擧受験を数年後にひかえた時期に洛陽に退居すると同時に、一族の子弟を教育することに情熱を注いだのである。洛陽が学習に適した環境であることは、嘗てこの地で学んだ白居易自身が知悉するところであつたであろうし、長安よりも閑静で緑豊かな洛陽の方が、子弟教育の場としてふさわしかったことは言うまでもない。『登科記考』には見えないが、白居易の子弟教育の成果は次のように図示できる。



白居易には、白味道（亀児）をはじめ四人の甥（うち一人は養子にとつた景受）がいたが、宰相世系表を見る限り、高官の地位に昇つた者はいないものの、まったくの布衣もない¹⁶。つまり、白居易の子弟教育はある程度実を結んだと言える。長部悦弘氏は、隋唐期において官立の学校や私塾による教育のほかに、血族や姻族による教育が行われていたことを明らかにしている。その場合、子弟教育の責任者は儒教的教育を身につけ士大夫として世に認められていた父親であるが、父親と死別した孤児の教育は、扶養者である伯父や姻族によつて実子同様に行われていたようである。白居易の場合、大和五年（八三一）に夭逝した阿崔を除いて息子はおらず、まさに長部氏の説くようにその甥たちを実子同様に教育していたのである。

ここで、さきほど取りあげた新昌里邸の売却という問題にたちかえつてみよう。「祭弟文」の記述に示されているように、白居易はこの時期二三年後には亀児を科挙に応じさせるつもりでいた。もし白居易の希望どおりことが運んだのであれば、亀児は大和五年前後に科挙に応じたはずである。一度で及第できるとは限らず、また制科や吏部試を受験することも考慮すれば、亀児の出仕の時期は、新昌里邸売却の年である大和九年（八三五）前後となるはずである。だが、『新唐書』宰相世系表を見る限り、白居易の甥には亀児を含め、白居易のように若くして長安に出仕できたと見られる人物は一人もいない。白居易は自らの甥が何時か長安で活躍することを希望していたにもかかわらず、甥の出世の進展が華々しくないため、取りあえず新昌里邸を手放すことになったのではないか。いずれにせよ白居易の洛陽退居が、ただ一身の明哲保身のためだけに行われたのではないことは確かである。

おわりに

以上、従来の観点とは異なる角度から、白居易と洛陽の関係について考察した。その結果、白居易にとつて洛陽は、嘗て貧賤に苦しみ国都長安へ羽ばたこうとして苦学を重ねた思い出の場所であり、辺鄙な遷謫地で望郷の情を寄せた地であり、また晩年には子弟教育に力を注いだ場所である、という意外な事実を発見した。

つまり白居易が晩年に洛陽を隠遁の地として選び、また一族の墓所が下邳にあるにもかかわらず洛陽に墓所を定

めたのは、若き日に洛陽で経験した忘れ難い思い出を土台とした必然的結果である。また兄弟を失い、その八人も遺児を一人で養育しなければならなかった白居易にとって、洛陽は、嘗ての自らと同じく白氏の子弟を羽ばたかせ、一族を繁栄へと導くべく教育に励んだ雌伏の地でもあったのである。

「醉吟先生墓誌銘」に「凡そ平生慕つ所、感ずる所、得る所、喪ふ所、経る所、逼る所、通ずる所、一事一物已上、文集中に布き、巻を開けば尽く知るべし」と述べられているように、白居易の洛陽に対する想いは、過去の記憶と重ねあわされ、より深い感慨をもってその詩巻の中に顕されているのである。

注

- (1) 洛陽についてふれた研究には、妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」(『白居易研究講座』第一巻所収、勉誠出版、一九九三)がある。
- (2) 『旧唐書』白居易伝に、白居易が下邳ではなく、如滿禪師の塔の側に葬るよう遺言したことが記されている。
- (3) 小論に引用する詩文については、那波本『白氏文集』を底本とし、南宋紹興本等諸本を参考した。また白居易の作品の繫年は、朱金城『白居易年譜』(文史哲出版社、一九九二)にしたがうことをお断りしておく。
- (4) 「和鄭方及第後秋歸洛下閑居」(〇六〇九)、「与諸同年賀座主侍郎新拜太常同宴蕭尚書亭子」(〇六一〇)、「東都冬日会諸同声宴鄭家林亭」(〇六一一)、「重到毓材宅有感」(〇六五五)、「自河南經乱内阻飢兄弟離散各在一处因望月有感聊書所懷寄上浮梁大兄於潛七兄烏江十五兄兼示符離及下邳弟妹」(〇六九一)、「冬夜示敏巢」(〇六九七)等、白居易が洛陽に居住したことにふれた論著はあるが、管見の及ぶ限り、洛陽退居が洛陽への帰郷であること、青年時代の白居易における洛陽と、晩年の白居易における洛陽とを直接結びつけて考察したものは見あたらない。
- (5) 川合康三『終南山の変容 中唐文学論集』(研文出版、一九九九)所収「長安に出てきた白居易 喧嘩と閑適」
- (6) 白居易には、同年「和鄭方及第後秋歸洛下閑居」(卷十三・〇六〇九)と題する詩がある。
- (7) このほかにも交際があつたと想像される人物に孔戡がいる。「孔戡詩」(卷一・〇〇〇三)を参照。

- (8) 元稹『送劉太白』(『元氏長慶集』卷十六)から、劉敦質の家が洛陽從善里にあったことがわかる。
- (9) 「和友人洛中春感」における「多情」が表すものについては、保効佳昭「唐に至るまでの詩に見られる『多情』の語について」蘇東坡の詞の「多情」の語を考察するために、「『商学集誌』人文科学編第二十二卷第三号、一九九二)に言及されている。同氏の考察ではこの「多情」は、「心の感受性が多く、情感に溢れた人のことを意味する」(十八頁)。
- (10) 注(一)所掲、妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」、二八〇頁を参照。
- (11) 拙稿「白居易の長安新昌里邸について」(『九州中国学会報』第四十三卷、二〇〇五)を参照。
- (12) 「新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士」(卷十九・二二五九)に、「或望子孫伝」とある。また、兄弟で新昌里の邸宅の拡張を計画し、白行簡亡き後、白居易がそれを果たしたことが、「祭弟文」(卷六十・二九三二)に見える。
- (13) 勞格・趙鉞『唐尚書省郎官石柱題名考』(中華書局、一九九二)を参照。
- (14) 花房英樹訳『白楽天』(みすず書房、二〇〇三)、四五〇頁。
- (15) 『新唐書』宰相世系表、並びに顧学頤「白居易世系、家族考」(『文学評論叢刊』第十三輯、一九八二)所掲「白居易世系表・第一表」を参照し作成した。
- (16) 「景衍」のみ無官であるが、「醉吟先生墓誌銘」に述べられるように、白居易の甥が三人(養子にとつた白景受は除外)であったとすれば、「景衍」は進士に挙げられた「晦之」に相当するはずである。なお原文は以下の通り。「三姪長曰味道、廬州巢県丞。次曰景回、淄州司兵參軍。次曰晦之、舉進士。樂天無子、以姪孫阿新為之後。」(『醉吟先生墓誌銘』南宋紹興本『白氏文集』卷七十一)
- (17) 長部悦弘「北朝隋唐時代における漢族士大夫の教育構造」(『東洋史研究』第四十九卷・第三号、一九九〇)。
- (18) 李商隱「唐刑部尚書致仕贈尚書右僕射太原白公墓銘序」(『唐文粹』卷五十八)に、大中三年(八四九)白景受が集賢御書を拝したとあるが、これは白居易の死後である。
- (19) 原文は次の通り。「凡平生所慕所感、所得所喪、所經所逼所通、一事一物已上、布在文集中、開卷而尽可知也。」